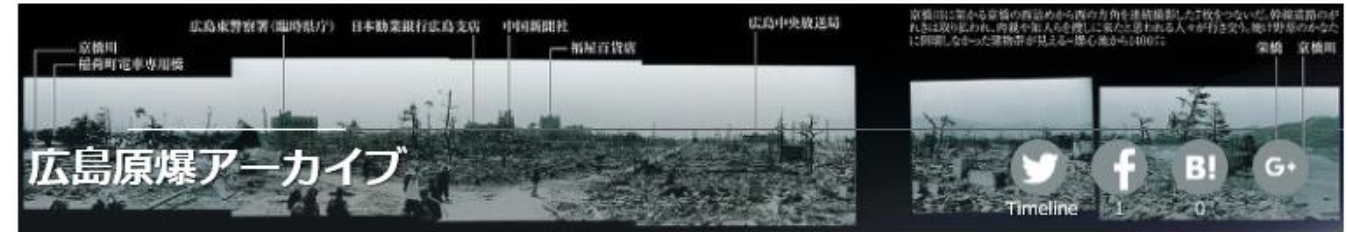


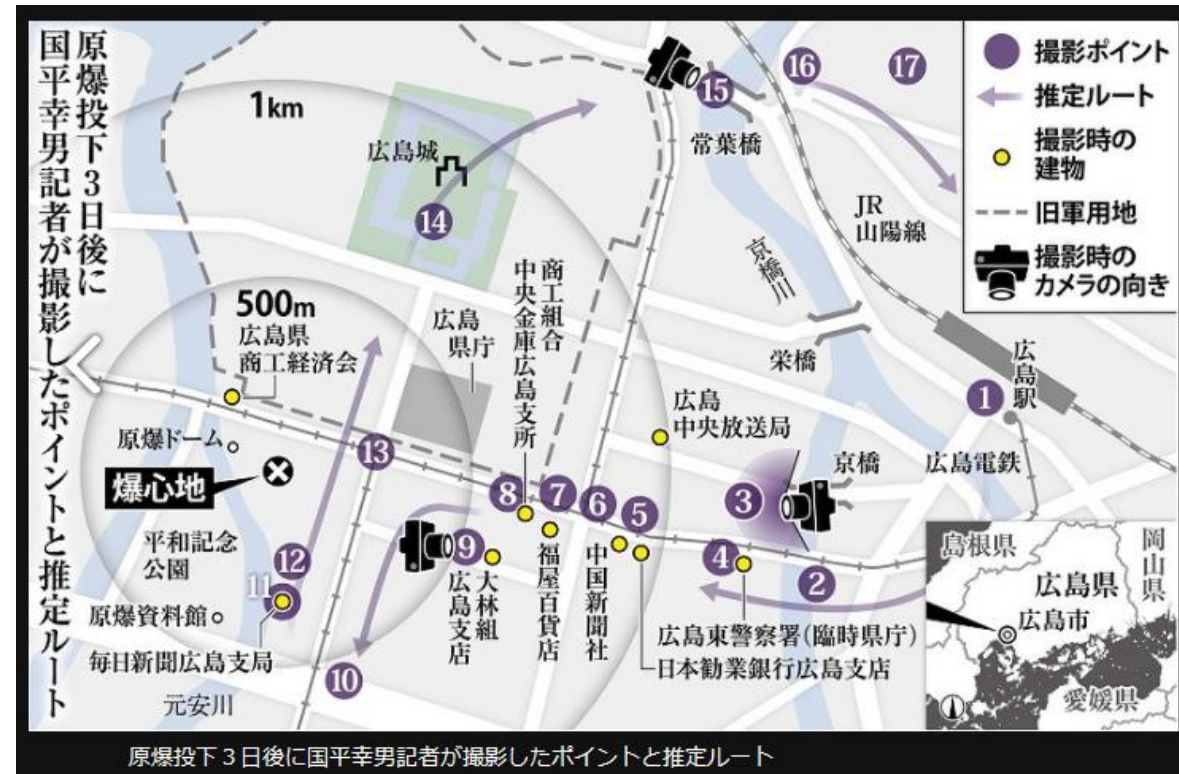
毎日新聞 広島原爆アーカイブ

毎日新聞（2017年2月19日付け）に大きな紙面を割いて「広島原爆アーカイブ」というページが紹介されている。原爆の3日後に大阪から派遣された記者が、広島を歩いて写した写真から何枚かが今回公開されたとのことである。どこの場所で写したのか、その場所が今どうなっているのか・・・？ 地図を見ながら比べて見るととても興味深い。一番目を引くのは、傷ついた少女の写真。生前の国平記者は広島についてほとんど語ることはなかったが、「少女に握り飯をあげると微笑した」、という逸話を家族に残しているという。この少女はその後どうしただろうか？

<http://mainichi.jp/articles/20170217/k00/00m/040/146000d>



1945年8月6日午前8時15分、人類史上初の核攻撃で破壊し尽くされた広島。その3日後、毎日新聞記者が撮った原子野の光景は、「核廃絶の原点」として後世に残さなければならない記録となった。「広島原爆アーカイブ」は広島原爆を撮った所蔵写真を順次公開していきます。



(上) 大手町筋にあった毎日新聞広島支局の焼跡から北西を撮影。支局は木造で、完全に焼失した。奥の左寄りに燃料会館（現在のレストハウス）、右には広島県産業奨励館（現在の原爆ドーム）が見える（爆心地から290メートル）＝広島市大手町3丁目（現広島市中区大手町2丁目）で、1945年8月9日、広島平和記念資料館（原爆資料館）検証（下）毎日新聞広島支局跡周辺（手前右）から北西を撮影。左奥は平和記念公園。木々に囲まれた建物はレストハウス（旧燃料会館）、中央奥には原爆ドーム（旧広島県産業奨励館）が見える＝2017年2月6日、山田尚弘撮影

(上) 被爆後の8月7日から臨時の広島県庁が置かれた広島東警察署（広島市下柳町、現広島市中区銀山町）には救援物資が次々と運び込まれた。元々は芸備銀行（現広島銀行）の下柳町支店だった＝1945年8月9日、広島平和記念資料館（原爆資料館）検証（下）被爆直後に臨時広島県庁となった建物の跡地には広島銀行銀山町支店が建つ＝2017年2月6日、山田尚弘撮影



(13) 紙屋町交差点南東角の電車の残骸。手前は100形電車、奥は200形の205号。右端後ろに見えるのは、大林組広島支店と安田銀行広島支店（爆心地から300メートル）＝広島市の紙屋町交差点1945年8月9日撮影

国平幸男（くにひら・ゆきお）

1916年広島県生まれ。尾道商業学校在学時に地元のアマチュアカメラマンクラブに入って写真にのめり込む。同校卒業後、42年に毎日新聞大阪本社写真部なって従軍カメラマンとして戦地にも赴いた。同部長、編集局参与などを経て71年に退職。2009年没。

<被爆者(被爆者健康手帳所持者)>

【2016年3月末 厚労省統計】

- 1号 → 直接被爆者=原爆に直接遭った人 =107,971人
- 2号 → 入市被爆者=2週間以内に市内に入った人 = 39,771人
- 3号 → 救援活動従事者=救護活動にあたった人 =19,114人
- 4号 → 胎内被爆者=当時お母さんのお腹にいた人 = 7,224人

合計人数 =全国に 174,080人
平均年齢 =80.86歳 (前年比 -9,439人)



見舞いのつもりであったが、話していくうちにやはり原爆のことが出てきた。「近頃は、こういうことも思うてのう……」 呟くような声であった。「あの世に行ったら、わしゃあ同級生に会わにやいけんが、十三の時の顔で会うか、七十三の顔で会うか？ ほいじゃが、七十三の顔で会うたら、あいつらわしじゃいうことがわからんかも知れんし、どうしたもんか思うてのう……そういうことを考えて、始末がつかんようになっとる……」 わたしは間を置いて「そうよのう……」 それだけ口にするのがやっとであった。

……織井青吾『原子爆弾は語り続ける ヒロシマ60年』(社会評論社)